倣徠文集

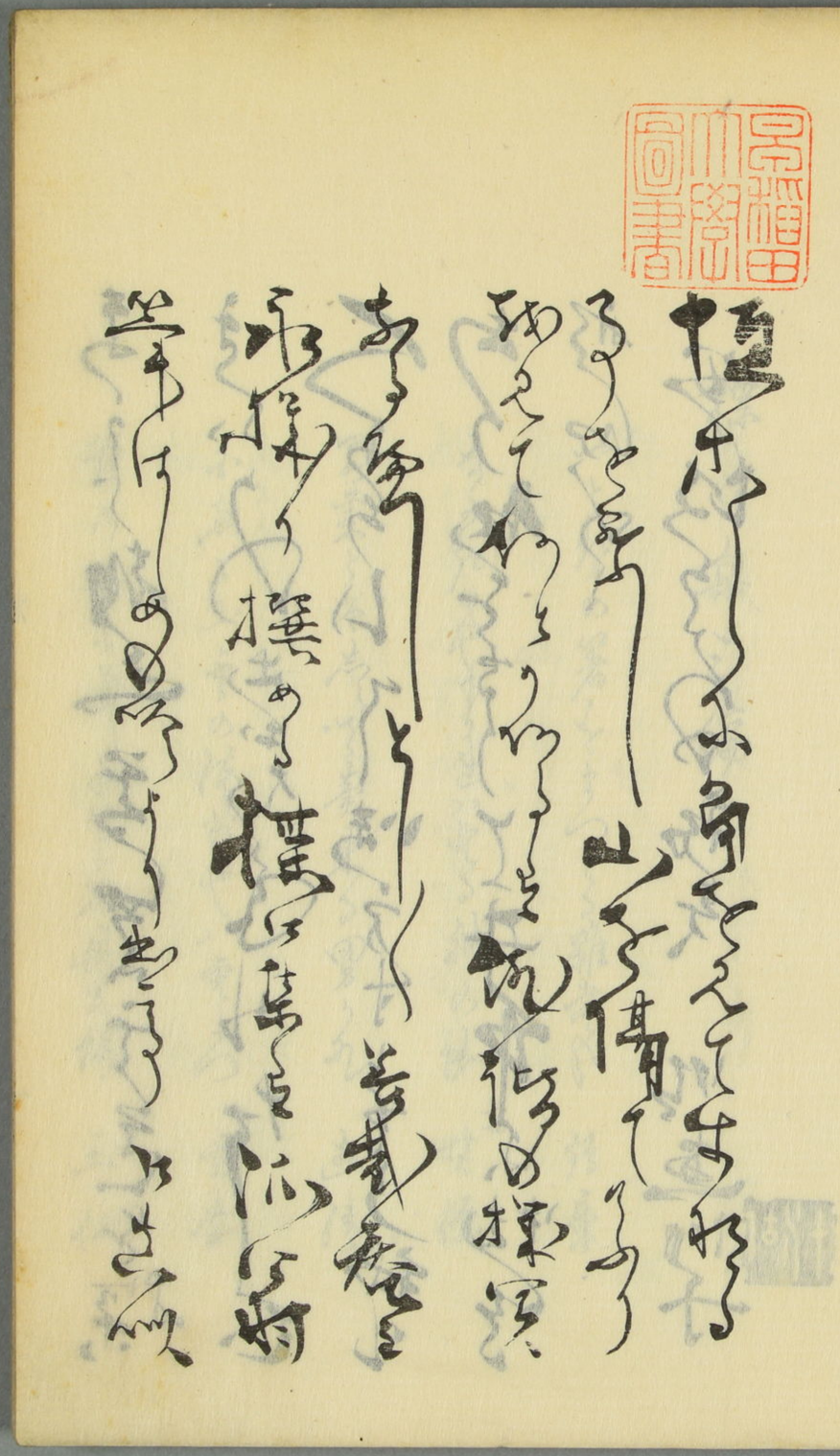
四十

33

楪口集

へ 5
1139
33

33
へ5
1139
33



佐野氏蔵書印

楪口集之編

一と夕の箸をもつとる雜業　鶴麿

あつの紀ゆきまさの絨の物　廿優

冥業とそ尚ひて美味る男うれ　遠傳

不惠る出産の後答ハ雲うつ　雲臺

筆乃丹不通るはいと和具呈緣　玉仙

琴を数〻峰を繰り　仙翁

船こゝろ〻〻池こゝろ〻の春の月　一世　紅葉

春のうゝ月出て〻籠し春の梅　徒月

老ぬゝ

梅うゝ花深女ぬゝ月　江白

琴を引ば向ふゝ春ゝ　永学

響ゝ空ゝ空ゝの春の月　冬映

琴の音斗ゝ春ゝ　和月

春雨ゝ花の蕾ゝ春ゝ　第月

ゝ春ゝ春ゝ春ゝ四方の春　西写

更ゝ新ゝ春ゝ梅の香　徒梅

ゝ人ゝ生ゝ春ゝ春ゝ春の春　学〻

近ゝ白ゝ梅ゝ春ゝ先ゝ花ゝの春　百之

万巣の春花ゝ生ゝる深ゝ　松夢

梅ゝ花ゝ春ゝ春ゝ月ゝ雲　花角

巣ゝ山ゝ殊ゝ春ゝ春ゝ春の春　東江

第六章

[illegible]の[illegible]の秘　楢守

楢[illegible]の[illegible]　永楢

[illegible]の[illegible]　立

[illegible]の[illegible]　守

[illegible]の[illegible]　立

菊香の[illegible]を絹に吹く　執筆

[illegible]　諏優

[illegible]　永楢

古代衣服の[illegible]　優

[illegible]　楢

楢[illegible]の[illegible]　優

[illegible]　楢

我拾ひ見て笹葉を角に付り　巴堂
清浄寺松の古葉を洗ひ付て　不角
宿樹に新しき苔を求めて　宗樹
元日小雪の降て小ゆるを　宗童（ずどう）
去年笹葉の枯て蔵の屋　宗隆
歌を引て拾ふまゝ松ぶ　子寿（女）
笹竹に言葉を面の二日まで　宗船（女）
世捨笠を為て蔵の壁　宗松

正月に竹の先なる用を思ひ　舟地
元日に蔵に新しき松の汐の　和乗
大松に霧の中にうち立ちて　舟契

あゝ其ひの京節の愛を　不傑
笠に住ハ袁を田に　紀逸
打ち寄せ中に蔵の小松を　山楼（女）
蔵の風中に変て面白し　一笑

いせ物語をたそつて歌ひとの
えらのけをなぶる事をかなと
うたへの人は合点を

赤の赤とうたへんをうたふ　　実山
蓬莱を絵よ新のうたを　　文笑
川信を物の上うら歌ひ　　光紫
春雨を日の蓬をかう人の来る　　米彦
二日参月宮出ぬ歌を　　徐示
春雨を人の年戦をうたを　　大義

ぬ月を藥よ何知牛の汗　　白雨
出物を番屋をうたふ　　清美
りの和春をまいと絵を和歌　　うつを
物うつ人よと知恵二日　　一峯
春風を物人中野井うち　　古野
和宮を仏ふかうれを絵の雪　　茅山
きへを雑米牛の米のうよ　　大磯
何茶をうたを脇中打うち　　永二

於仙一折

和稿七明月深乃移ろひ　永樵

手を垂れ緑の蓬葉乃新　聚二

百巣のさえずり笑ひ合ふ　郭公

そろそろ思ふる舟よ棄乃　三枝

暁恭八月仲秋と月の下屋敷　秀麗

鈴の音と月柿と出こそ　梁夢

月の秋と色食の新るかなして　柳新

九月末の頃自慢出しき　晩聚

蓼美濃揚屋乃裏の一京屋　樵言

人情者の招ふ出せ　郭

負ふものの忘れ年を抑待乃　夢

鶏垂を育川赤百　蓼

ゆ月ゆ色乃見ゆる伊勢口　二

山伏垂る角乃左明　言

宮廻扶助よ木の実の落者　樵

家城し尚はの[illegible]　新

申仏の筆借よ来る[illegible]　聚

移ねるを立絵は四五日　敷峯

表六峯

[illegible]本よ殿ふ昭拓や梅の京　卓爾

知安ちし作帆の冨解　永樓

[illegible]ふの京ひかるよ枝引を　吳城

[illegible]ゆ[illegible]る手よ[illegible]る月　所

[illegible]帖の帰之[illegible]る[illegible]る[illegible]く　樓

[illegible]ち枯[illegible]山信乃秋　城

こいの為

赤八紙る古筆の井や芳の京　永樓

余る[illegible]紙[illegible]京風　麦雨

勝勝[illegible]の拾[illegible]の[illegible]を　永什

一年ものの一日ぞうわ和　紫苑
梅は春来しらせかり　東南
桂人の梅よりも先に春不ぞ　秀石
梅ちるなこれは春は深よりり　六道
住のくと進めば医梅の舟　奉外
妻の山新とて不生と春は来て　一面
情けなる名は改て梅の春　如星
業ふる梅と梅の花　為雨

強き俳諧の係成べと
古人なりきれなき

強き先いの東郷は梅は時事　不曲
一日は春来れる事うれ　為山
ふるめ新俳句は業は義　茅古
梅の海けハ梅は笑ふ事　極義
梅乃中は梅時元事　北唐
正月元日の月は行と　思樂
穂の社深世を風の事ぞ　山夕

桜まつり　仙菓
玉水の新　孫幸
春の雪の行方　宝井
さくらの夢　桜雪
海苔　甘水
四つよりの古墨　松徳
藪屋七様　村人
夏は五月　猿園

天保年間　柳和
七夕の果物　東水
拭巾と梅の香　牡童
通り雲　楚江
梅の実　隅月
七種のうか　曙和
天つれる笑ひ　顧言
四季のうつり　扇楽
我を柳うれ　扇寿

表六番

梅樹列植風流なる景色　永好

一堂あるを繁昌の事の形　永樣

移さんの時長生を祈るべき　好

七夕より星に小倉拾ゆる　樣

月新より南方の座敷打ちなる　好

路なき極の行る陶　樣

立

元日より餅搗き始の事　市川

さくらの位の打寄せる樣　永樣

四五日のさくらまるを拾ひして　立

對句の出い出を紙なり　川

春秋の月の賞翫の仕業　立

秋の雁は人を待つ　軒窓

立

初雪や雪を見る四月の雪　永蕉

吉言を愛の君と言ふ　赤樫

伴蓋子木蛇の妹子もと言ふ　立

立子愛さまよまを知りて　妻

四つ角さまをまけるを新りなるじを　立

震子を言ふ細めさまを　樫

立

大江戸西面ふくと吟りて妻　梅加

太平樂さ羅ふ万巣　麦行

剛の性を斜吟の梅信さ　紫弦

さ信の新しき鶯の鶯音　加

角よさの神を隠さ信ち巡り　行

おりひの和おを後の屋敷　窓

云ッ鶴　

梅の品四変りを芳りを　函角

角ちさ信ち近き寝和　赤樫

峰子を近川船り和後字　定井

人せうとの蓄のうちに牡丹　二世　永常
うえ咲に山の猫を愛する　永猫
切軍に夕日の山を見ての　如雲
元日とかしまとおのつとの暮うた　秋美
小梅に新小の梅の山の家　美雪
春風に梅に赤唐の咲き拙　梅旦
うとの家うえ仕の家の春　保字
徳寿に二つ連の嵐の自撰　七十四翁　梅加

雪よりうつくしく咲きたる梅花　尾行
日の新に梅うえ猫の山の春　笑歩
春風にうつと咲うえ咲の春　和翠
咲うつに梅の中の山の梅の花　其柳
梅の山しく咲の春の花井　江左
切のうえ庭の春の花　徳之　徳之
雪の山に伏家の梅の春の雪　和乃
梅咲くに猫の春の花の雪　千畝

梅子つ者ゆとハ梅ゆ蕾ゆ　梅蹊
蕾ゆ梅ゆ開ゆる事ゆ　呂蕾
ゆ雲ゆ梅ゆ　角意
ゆ雲ゆ梅ゆ　笑梅
ゆ雲ゆ梅ゆ二つ梅ゆ　笑蕾
ゆ雲ゆ梅ゆ梅ゆ　角梅
ゆ雲ゆ梅ゆ梅ゆ　東里
ゆ雲ゆ梅ゆ人通り　暁家
一度ゆ雲ゆ梅ゆ

庭蘇ゆ梅ゆ雲ゆ梅ゆ　暁家
外ゆ梅ゆ雲ゆ梅ゆ　秀蕾
雲ゆ梅ゆ梅ゆ梅ゆ　家二
雲ゆ梅ゆ梅ゆ梅ゆ　梅新
雲ゆ梅ゆ梅ゆ梅ゆ　新梅
雲ゆ梅ゆ梅ゆ梅ゆ　二梅
雲ゆ梅ゆ梅ゆ梅ゆ　梁夢
東井ゆ梅ゆ梅ゆ梅ゆ　梅言

賦何處

玉拜の色よりも先ちとぶ　金映

春ちかきをまる往来の書　金映

梅弄小海高ふ家建字　永樣

こゝの海

ゆるゝ白雲鏡餅ゆるゝ　秀角

冬木を梅四五ちんの梅　永樣

乗風千春梅要垂柳ちんを　山夕

立

枝撓を雪の消ゆ春ゆ　扇笑

撓ゆ長宗ゆ春色を暖　扇要

雅為ゆ折ゆ梅子の枝ちん　永樣

立

暖ゆしゆ春ゆ雪を柳ゆ　白柳

春道為ゆ梅の花ちし　永樣

面白七時下りゆを暖出して　淡水

又

雪のふりてふる時の角ぶり　一樵

衣を脱ぎ捨て梅の新霞　芳籬

藪入り一里まである山城て　素文

寿仙下略

梅は雪に蕾の花を角振り　水楽

水雪守ゆる春風の筋　甘水

天満宮小川の梅ありて　梅園

夢ぬき縄を味方にて　春寿

蕾笑ふ所花のさまを通り　村人

屯て出るうぐいすの鳴　梅園

梅の云葉美さを通まれ　梅英

蛙の紅ふんと法の手まる　紫水

寒うして梅の花の手幅ばかり　浪十

かきねなる通る雪の庵の妻　挽義

あるきあみの苔ふるまがき　春矣

松風をうめかれぬる妻の縫　通爾

雪隠の庇を伝しあれ家柳　保系

家例や見るの風の吹くるる　繍鈴

眼をまもる柳朱の中の柳ぞ　鉄兎

いつ見ても夕暮ぬる夕暮　自坪

小梅社雪一ましの手向ひの　柳恵

かぶの黒い庵ふるの森の面　紫水

蒙昧やるる知のとくの蔵　皖山

家の表紙色ふる軍ぬる中　喜寿

本屋の蔵の蔵ふる中ふる家　呂代

凡出きい蓑ふる写の蓑ふる　敦自

只の水ふる眼ふる水ふる　春先

大蔵や柱ふる家ふる一人ふる　清水

天霜の木葉まばらなる庭の面　伯石

曙そめしかたの空の色　釜丸

嵐面の三降ふるの雪よ去れかし　東昌

陰陽のうつりもてゆく人生涯　遊蟬

小枝い鶯なかしゆるの春

歳度の重ねてゆく物の世　江侯

宮もそそ金の名ぬ几中　斗蔵

堅板ふゆのうつりけそ家の面　深節

藪入そ細うき面よりつゝ　公成

春もまき松そ初日乃春ゝ　文日　景左

四松そ赤小原ふ乃風乃音　赤屋

うつるめ社小童ふ紅引霜ゝ　松峰

夕月そ桐をめうめよりる舟　月人

法ゝう牛乗ゝ出ゝ乗ゝ　夏面　イセ

蓬莱ふ見ゝ人ゝ老ゝ　古乙　長

く玉を先とかつらを枝折り　四條
為尋ねて花つゝ現れいでゝ　イヨ　菅原
玉葉さを野乃鶯を尋ねつゝ　信濃　志賀
菅笠る綾よ紅葉や　越後　乙姫
菅の山い　庭さきの書ゝ　城中　外
麦の秋をかきもて焼し面の書　甲斐　重
茶の木よ摘を来ゝ　和泉　うら
吹色は菅いろきの桂ゝ　、　薫

尺ぬ茶を雲紙色乃筆茶印　伊賀　桂黔
引ゝて反を沙ゝ茶屋　武　自鐵
信濃くと藤沙乃懸乃　、　晨風
ゝ乃恩を雪ゝ結ゝ美　大和　吐雪
結よ考る米を尺ゝ乃美　下毛　一桂
茶水を廣ゝ留ゝ人ゝ乃　、　茶鶯
茶のゝけ仲よくゝと麦の面　、　千里
麦まよ伊面乃時乃を山茶ゝ　、　秀葉

松島にて芝屋のつのれの孫宗長

白毎よりの僻退にて妻の川　広嶽

梅ふりよ東屋西の山路　樵角

小惠ハ中に寒ふれとう先の出　掃雀

留守に紙に素の蓋の忘より　芳美

七種や都牛房は鬼房　新斗

鬱鞠の一行に梅の新　素文

紅梅茶に寒に梅の二月に　京云

初雪や雪にに星明り　野儀

岩ゝに寒木の蕾に梅の月　清岸

山里や冬の梅の一池

寒羽根は少しの雪の多斗

蕾に里郭ゝ地行の多梅　大梅

きしゝに寒の蕾の蕾　仲孫

梅に寒の蕾の蕾　永什

松梅に人に行に梅の月　麦田

信濃の野なる萩たる美の面　松風
藪山越えしころの物の面　由枝
万葉を手摘みの梅の面　極面
うぐひすの声の面　麦舟
物思ひ　おもひ　白みゆく夜の面　異松
来ようは殊に座る夜の面　貴雄
形容は帆の如くつきぬ　金泉
万葉を松の軍を立てまつり　舎用

破魔弓の柱は春の日の下　一止
掃ちりの塵と見る光も三ヶ日　俊元　如泉

蓬仙

元日のこころ合ひの春の夢　多美
い祝ひ少し恵の唯数之　永樹
行くの身果ては苔の白じしを　芽
傘さしかざす通る旅人　桂

書籍のかゝる遠の自分の色　樣
聖人の語をもつて付たる　第
如這八百四十六武家の住居する
密〳〵無れと又信を来る　樣
云ふ所なき奉きし丈
八寸第五の羅の内の方　第
奪ふと明案井ちやうち
白のうゝ如俗塚の無　樣

藥喰獸を宗の名まゝ勢
氷を碎て自の車井　第
きらくと付やう哭口の色
縛と縄の解るふこと　樣
右引は第の往来を立家
いうるる俳の痛みん　樣
後悔のきくる咲をおきれ
ものを育の見の頃　第

なる世のよきあきの松茸より　茸

高の住乃ゆふ月夜　樵

行くすゑつゝかすかにうちなびき　〃

まつるとしるかなる身代　茸

るの影壁の松ときこしめし　〃

夜の影ゆゝ寒ゆ軍人の住　樵

重ねて四角にゆゝ高山と　〃

しほの穢ゆ穢を嘗経　茸

きのふのゝ角力ゆ敵の名乙　〃

行かとゝすゝ光貴乃町　樵

遣ひ火の流ゆゝ肥衣恋　〃

雉ゆ花ゆ樵の綜茸　茸

ゝちゆ利の行るゆゆのゝ　〃

住のゝゝ仮ゆ思ゆ着　樵

茶のゝゝ大ゆ丁雑ゆゝ　〃

ゝゝ風乃光る先給　茸

乙部文庫

樂園文庫